

# 「マウク」における漢字「設」の意味用法の影響

こ 鴻洋  
こ 鴻洋

## キーワード

マウク, 設, 意味借用, 文体, 漢文訓読

本稿では、動詞「マウク」が漢字「設」の意味をどのように受け継いだかを考察する。「マウク」の〈設置する〉〈敷く〉〈並べる〉〈施す〉という四つの意味は、漢字「設」に由来するものである。そのなかで、〈設置する〉〈並べる〉の意は、和漢混淆文のみならず、平安和文にも例が見られ、漢文訓読的な言葉遣いをしそうな人物に用いられており、和文に導入された漢文訓読的な意味である。〈敷く〉〈施す〉の意は、平安和文に例がなく、和漢混淆文のみに例が現われ、〈設置する〉〈並べる〉の意と比べ、より本格的な漢文訓読的な意味である。

## 一 はじめに

古代の和語の意味は、その語が持つ固有の意味に加え、漢文訓読に用いられた結果、漢字の意味を取り入れた場合がある。これについて、ジスク・マシューの一連の研究が挙げられる。同氏は、ジスク（2009, 2012）では、「うつす」「あかす」などを取り上げ、漢字の語義によって新たな意味を獲得したことを指摘している。ジスク氏の研究はさまざまな語に見られると予想され、日本語の語義変化の一つのありかたとして注目される。本稿は日本語の意味用法に漢字の影響が見られると考えられる一例として「マウク」を取り上げ、その意味用法に訓読された漢字の字義がどのように影響したかを明らかにするものである。

「マウク」の意味用法の先行研究としては、間宮（1986）、土居（2005）が挙げられる。間宮（1986）は、「マウク」が〈来たるべき事態に対して、前もって用意する〉という原義から、〈来るのを見込んで、待ち受け、迎える〉意味に発展し、待っていたものが実際に来るところから、〈身に持つ〉という意味を獲得し、思わぬ良いものを手に入れたことにより、〈得をする〉という意味に拡大したとしている。土居（2005）は、「マウク」が〈必要なものを手元・身近に用意する〉というところから、〈子供を持つや後見を得る〉ことを表現するようになり、心の中での準備として現れる場合、〈覚悟や決心を表す〉ことに発展したとしている。両氏ともに「マウク」の意味用法の変遷を日本語内部で自然に起こったこととして扱っていると言える。しかし、両氏のような意味変化の説明は、漢語の影響面を考察した結果ではない。日本語の多様な意味を持つ語の記述は、ジスク氏の研究を踏まえると、漢語・漢字の影響を踏まえて検証すべき点が多いのではなかろうか。本稿では、「マウク」の意味用法のいくつかを「設」によって説明できるか否かを問題とする。

鳴海(2016)は和語の意味用法が変化・拡大した要因を漢字の影響と解釈する場合、漢字の影響が和語の語史研究の中で、直接明らかにしやすいものを選定すべきであると述べており、考察対象としての和語と漢字を合理的に選ぶ重要性を強調している。築島(1963)は、「マウク」と「ソナフ」は和文体、漢文訓読体の両文体で対立する語の組み合わせとして挙げている。「マウク」は全体として和文語の性質に偏ると言える。後で述べるように、「マウク」は平安和文では主に「船」などの具体名詞を受ける例が多く見られるのに対して、訓点資料では「教」などの抽象名詞を受ける例が主であり、用法上の相違が見られ、「マウク」が漢文訓読の影響を受けた可能性があると思われる。すなわち、平安和文、訓点資料のような性格が異なる資料における「マウク」の意味用法の偏りから、「マウク」の語史において、漢字「設」の影響が無理なく説明できることをある程度窺えると考えられる。

本稿では、漢文の「設」の意味用法と、『萬葉集』における「マウク」の固有の意味用法を考察し、また、平安時代以降の訓点資料、平安和文、和漢混淆文における「マウク」の意味用法を検討し、和語「マウク」の意味用法における「設」の影響を明らかにすることを目的とする。

## 二 『萬葉集』における「マク」「マク」「マウク」

漢字「設」が和語「マウク」の意味用法に与えた影響を確かめるには、「マウク」の固有意味への把握が必要である。『萬葉集』に「マウク」のほか、「マク」の例も存しており、両語は語源的に関係していると思われる<sup>1</sup>。「マウク」は『萬葉集』に1例しか見られないが、『訓点語彙集成』に100例見られる。後で述べるように、平安和文に122例、和漢混淆文に285例が見られ、平安時代以降一般的に定着したことが窺える。それに対して、「マク」は『萬葉集』に単独動詞1例、複合動詞「マク」6例見られるが、訓読例として大毘盧遮那成仏経疏治安四年点<sup>0 2 4</sup>に1例、蘇悉地揭羅経略疏天曆五年点<sup>9 5 1</sup>に1例、計2例しか見られず、平安和文に例が見出されないところから、上代の古形と推測される。

「マク」が古形ならば、「マク」「カタマク」「動詞連用形+マク」を含め、「マウク」の固有の意味を考察する必要がある。上代では、祝詞、宣命に「マウク」「マク」「カタマク」「動詞連用形+マク」の例が見られない。『萬葉集』では、仮名書き例は「マウク」1例、「マク」1例、「カタマク」2例が見られる。漢字書き例のうち、「マク」1例(1485番歌)、「カタマク」2例(1854, 2133番歌)、「動詞連用形+マク」2例(744, 3124番歌)は、『校本萬葉集』にある古写本に訓みの異同がないため、仮名書き例とともに考察対象とする。なお、「マク」計2例は、すべて季節を表す語を上接している。蜂矢(1955)は、季節を表す語を上接する「マク」が大伴家持作とされる歌のみに現われ、かつ、838番歌(例(1))が家持の追和の作も見えるため、「マク」はカタの省略による家持の新造語の可能性があると指摘している。そのため、本稿では、季節を表す語に続く「マク」は「カタマク」の略語と見なし、「カタマク・マク」で一括して分析する。以下、具体例を挙げながら、「カタマク・マク」〈動詞連用形+マク〉〈マウク〉の意味を考察する。

〈カタマク・マク〉…6例

『萬葉集』において、「カタマク」は4例、「マク」は2例見られる。

(1) 梅の花 散り紛ひたる 岡辺には うぐひす鳴くも 春かたまけて (波流加多麻氣  
豆) (大隅目楨氏鉢麻呂) (5・838)

(2) 夏まけて (夏儲而) 咲きたるはねず ひさかたの 雨うち降らば うつろひなむ  
か (大伴家持) (8・1485)

「カタマク」について、『日本国語大辞典 第2版』『小学館古語大辞典』は自動詞とするが、『小学館古語大辞典』の「語誌」に「待ち受けるというのは意志的行為だが、それを時の方を中心に見れば、その時になるということになる」とあり、『時代別国語大辞典 上代篇』に「時が片近く…その時間をマク(待ち受ける)意から転じたものか」とあるから、「カタマク」の本質は他動詞と思われる。「カタマク/マク」計6例はすべて「季節を表す語+カタマク/マク」という形で用いられ、〈季節がくるのを待ち受ける〉の意味に解される。

〈動詞連用形+マク〉…2例

「動詞連用形+マク」計2例あり、「アケマク」「トキマク」それぞれ1例見られる。

(3) 夕さらば 屋戸開け設けて (屋戸開設而) 我待たむ 夢に相見に 来むと言ふ人  
を (大伴家持) (4・744)

(4) 雨も降る 夜も更けにけり 今更に 君去なめやも 紐解き設けな (紐解設名)  
(12・3124)

例(3)は大伴家持より妻の坂上大嬢への歌であり、下線部は「家の戸を開いている状態に用意して、(あなたがくるのを)待ち受けていよう」の意と理解される。例(4)の下線部は、「着物の紐を解いている状態に用意して、(あなたがくるのを待ち受けていた)」の意と理解できる。すなわち、「動詞連用形+マク」は〈(人がくるのを待ち受けて、) 具体物のある状態に用意する〉ことを表している。

〈マウク〉…1例

「マウク」は具体名詞「船」を上接している。

(5) 天照らす 神の御代より 安の川 中に隔てて 向かひ立ち 袖振り交し 息の緒  
に 嘆かず児ら 渡り守 舟も設けず (麻宇氣受) 橋だにも 渡してあらば その上  
ゆも い行き渡らし 携はり うながけり居て… (大伴家持) (18・4125)

例(5)の牽牛星、織女星は大伴家持とその妻の坂上大嬢の譬えである。この例は「渡り守が(平素、牽牛星、織女星を待ち受けて、) 船を出港できる状態に用意しない」という意に理解される。そのうらに、七夕の日に、渡り守が(牽牛星、織女星を待ち受けて、) 船を出港できる状態に用意するという意が隠れている。すなわち、「マウク」は〈具体物を移動できる状態に用意する〉の意に理解できると考えられる。

以上、『萬葉集』に見られる「カタマク・マク」「動詞連用形+マク」「マウク」の例を分析した。「名詞(カタ)+マク」は〈季節がくるのを待ち受ける〉の意、「動詞連用形+マク」は〈(人がくるのを待ち受けて、) 具体物のある状態に用意する〉の意を表しているこ

とから、「一マク」の源である単独動詞「マク」は〈待ち受ける〉〈具体物がある状態に用意する〉という二つの意味を持つと推測される。「マク」から転じた単独動詞「マウク」は〈具体物を移動できる状態に用意する〉の意を表している。

### 三 漢文の「設」と訓点資料の「マウク」

前節では、「マウク」の固有の意味が〈具体物を移動できる状態に用意する〉であることを『萬葉集』の用例から確認できた。漢文訓読の場で「マウク」が漢字「設」の訓読に用いられた。漢文の「設」はどのような意味をもつか、どの意味が「マウク」の固有の意味に対応するかを本節で確認する。

原本系『玉篇』は、古代知識人が漢文読解、文章作成などに愛用された工具書であり、そこに載せる「設」の意味が日本語に流れ込みやすいと考えられる。「設」の意味を原本系『玉篇』を参照すると、

設 尸熱反，周礼，設官分職，野王案，設，猶A置也。毛詩，肆筵設席，伝曰，設席，B重席也。韓詩，鐘鼓既設，設，C陳也。公羊伝，權之所設，何休曰，設，D施也。国語，必設以此，賈逵曰，設，E許也。広雅，設，F合也。(原本系『玉篇』卷九言部)と記載されており、A「置也(官職を置く，すなわち，設置する)」B「重席也(座布団を重ねる，すなわち，敷く)」C「陳也(並べる)」D「施也(施す)」E「許也(許諾する)」F「合也(合わせる)」という六つの意味があることが分かる。そのなかで、A〈設置する〉B〈敷く〉C〈並べる〉D〈施す〉という四つの意味は「マウク」に与えた影響がより深いと思われ、本稿はこの四つの意味のみ考察する。なお、本稿では、「設」の意味として〈設置する〉の意を①、〈敷く〉の意を②、〈並べる〉の意を③、〈施す〉の意を④とする。また、〈具体物を移動できる状態に用意する〉という「マウク」の固有の意味を⑤とする。

『訓点語彙集成』に載せる「マウク」は計100例(設84例，儲8例，舖2例，施1例，抗1例，啓1例，御1例，疑1例，辨1例)ある。そのなかで、文脈が確認できる、「マウク」が付された例は、「設」61例，「儲」4例，「辨」「施」「抗」各1例，計68例見られる。この68例の「マウク」を①～⑤の意に即して分類すると、【表1】になる。

【表1】に示したように、訓点資料の「マウク」は①〈設置する〉の意に解される例が10例，②〈敷く〉の意に解される例が4例，③〈並べる〉の意に解される例が20例，④〈施す〉の意に解される例が28例，⑤〈具体物を移動できる状態に用意する〉の意に解される例が6例である。訓点資料の「マウク」は全体として③〈並べる〉，④〈施す〉の意に理解される例が多く見られる。次に、訓点資料における「マウク」の具体例を挙げながら、その意味用法を説明する。

#### ①〈設置する〉の意…10例

①の意に解釈される「マウク」は、すべて「設」に宛てられており、目的語として、「壇場」3例，「楽(隊)」2例，「五廟」「母厨」「戯」「兵」「位」各1例である。

(6) 因説上<sup>マツ</sup>設立渭陽五廟。(大東急記念文庫本史記卷十孝文本紀延久<sup>1</sup>五年<sup>0</sup>点<sup>7</sup>三年<sup>3</sup>)

【表1】訓点資料における「マウク」

資料名		設(61例)抗(1例)				備辨施	計		
		①	②	③	④	⑤			
中国	内典	830	西大寺本金光明最勝王經十卷			1		1	
		830	箕面学園本観弥勒上生兜率天經贊卷下				1	1	
		850	天理図書館本金剛波若經集驗記卷中					1(辨)	1
		950	石山寺本妙法蓮華興玄贊卷第六					1(施)	1
		950	興聖寺本大唐西域記			1		1(儲)	2
		1016	天理図書館・京都国立博物館本南海寄帰内法伝			4	3		7
		1020	石山寺本成唯識論十帖				2		2
		1025	東寺金剛藏本最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌一帖			1			1
		1050	石山寺旧藏金光明最勝王經	1	1		3		5
		1050	京都国立博物館本千手千眼陀羅尼經一卷	1					1
		1050	東大寺図書館本法華文句			1	2(設抗)	1(儲)	4
		1082	高山寺本大毘盧遮那成仏經疏卷第二～十				4	1(儲)	5
		1087	立本寺本妙法蓮華經			3	3		6
		1093	仁和寺本大毘盧遮那成仏經疏第二帖					1(儲)	1
		1103	高山寺本大毘盧遮那成仏經疏十九帖				1		1
		1105	前田本眞報記			2			2
		1123	大東急記念文庫本辨正論卷第三			1			1
	1128	法隆寺本南海寄帰内法伝卷三			1			1	
	1163	石山寺本大唐西域記卷第一～八	1					1	
	外典	1073	東北大学本孝文本紀第十	1				1	
		1241	内藤乾吉本古文孝經	1			6	7	
		1250	高山寺本莊子卷三十	1			1	2	
		1344	醍醐寺本遊仙窟	1				1	
	日本	1079	大東急記念文庫本金光明最勝王經音義		1			1	
		1100	高山寺本三教指帰	1	1	1		3	
		1100	最明寺本往生要集	1		3		4	
		1124	唐招提寺本戒律传来記卷上			1		1	
		1150	前田本日本書紀卷十四	1				1	
1155		天理図書館本三教指帰		1			1		
1284		金沢文庫本弘決外典鈔				2	2		
計		10	4	20	28	6	68		

①：設置する。②：敷く。③：並べる。④：施す。⑤：具体物を移動できる状態に用意する。

(7) 当向千眼大悲像前設<sup>ケテ</sup>其壇場。(京都国立博物館本千手千眼陀羅尼經平<sup>1</sup>安<sup>0</sup>後<sup>5</sup>期<sup>0</sup>点)

①の意に解される「マウク」は基本的に、例(6)(7)のように、固定の場所に建物を建てることを表す。

#### ②〈敷く〉の意…4例

②の意に理解される「マウク」は、すべて「設」に宛てられており、「座(席)」のような平らなものを目的語とし、座席を敷くことを表す。

(8) 安置処所<sup>マウク</sup> 設 四王座。(石山寺旧蔵金光明最勝王經卷六平<sup>1</sup>安<sup>0</sup>後<sup>5</sup>期<sup>0</sup>点)

例(8)は、(僧の法座の近くに)四人の王の座席を敷くことを表す。観智院本『類聚名義抄』の「設」の項目(法上・五十六)に「尸熟反 和セチ マウク タトヒ ヲサム モシ シク マヌカル 置也 合也 陳也 計也 列也 飼也」とあり、和訓「シク」が掲載されているが、例(8)から分かるように、訓点資料では「設」は〈敷く〉の意に解されるが、「シク」でなく「マウク」で訓読された可能性もある。

#### ③〈並べる〉の意…20例

③の意と見られる「マウク」は、すべて「設」に宛てられており、「食」「供養」「齋」「机」「香花」「酒」「祭(品)」など飲食、供養に関する名詞を目的語とし、ある場所にあるものを並べることを表す。

(9) 菓を採り、水を汲ミ、薪を拾ヒ、食を<sup>マウ</sup>設ケ、乃至身を以て而も床座と為シテ身心(も)卷ムコト無(か)リキ。(立本寺本妙法蓮華經卷五寛治元年点)

「設」の基本義は、『説文』に「設、施陳也」とあるように、〈陳列する〉の意、すなわち、〈並べる〉の意である。例(9)の「マウク」の前後に場所を表す語が用いられなくても、被訓字「設」の基本義にもとづいて、「マウク」は〈(仙人の前に食べ物)並べる〉の意に解釈されやすい。

#### ④〈施す〉の意…28例

④の意に解される「マウク」は、「設」に宛てられた例が27例であり、「抗」に宛てられた例が1例であり、「儀礼」「教」「言」「方便」「法」「薬」「神通力」「難」「異端」「礼」などを目的語とし、ヒトにあるものを施すことを表す。

(10) 既識病源已、隨病而<sup>マウ</sup>設薬。(石山寺旧蔵金光明最勝王經卷九平<sup>1</sup>安<sup>0</sup>後<sup>5</sup>期<sup>0</sup>点)

(11) 庭ヲ分チ礼ヲ抗ケテ我カ道ノ真を崇<sup>マウ</sup>フ。(東大寺図書館本法華文句平<sup>1</sup>安<sup>0</sup>後<sup>5</sup>期<sup>0</sup>点)

「設」の四つの意味のなかで、①〈設置する〉②〈敷く〉③〈並べる〉の意はそれぞれ固定の場所(移動しない場所)にもものを設置すること、座席を敷くこと、ものを並べることを表すのに対して、④〈施す〉の意はヒト(移動する場所)にもものを施すことを表す。

#### ⑤〈具体物を移動できる状態に用意する〉の意…6例

⑤の意に解される「マウク」は、「施」「辨」「儲」に宛てられており、「法財」「香油」「資財」「米」(各1例)、「貨物」(2例)を目的語とし、「マウク」の本来の意味用法に最も近い例と思われる。

(12) 外に法財を施ケたるをば出と名(づく)。(石山寺本妙法蓮華經玄贊淳祐古点)

(13) 其僧報曰、此是三代尊客住持之处、正是師僧依止之处、云何不得。其僧即辨<sup>マウケ</sup>て香油、往彼念誦。(天理本金剛般若經集驗記平安初期点)

(14) 構立館舍儲<sup>積</sup><sup>(み)</sup>テ資財。買地買戸辺城以賑往来。(興聖寺本大唐西域記平安中期点)

「施」を「マウク」で訓読した例(12)は、外の人に財宝を施すことを出と名付けるという意味である。「財宝」は、それを受け取った人とともに移動するものである。「辨」を「マウク」で訓読した例(13)は、僧が香油を持って仏堂へ念仏に行ったことを表している。「香油」は僧とともに仏堂へ移動するものである。「儲」を「マウク」で訓読した例(14)は、「資材」が隣国で地を買い、辺城で戸を買うことに用いられる(移動する)ものである。例(12)～(14)の「施」「辨」「儲」のいずれも〈具体物を移動できる状態に用意する〉意味に理解できる点で共通している。

以上のように、漢文の「設」の意味、訓点資料の「マウク」の意味を検討した。①〈設置する〉②〈敷く〉③〈並べる〉の意はそれぞれ固定の場所(移動しない場所)にもものを設置すること、座席を敷くこと、ものを並べることを表す。それに対して、④〈施す〉の意は、「儀礼」「教」「言」「方便」「法」「薬」「神通力」「難」「異端」などを目的語とし、ヒト(移動する場所)にもものを施すことを表し、〈具体物を移動できる状態に用意する〉という「マウク」の固有の意味用法に最も近いと考えられる。すなわち、④〈施す〉の意は、漢字「設」と和語「マウク」の接点と推測される。

#### 四 平安和文における「マウク」

平安和文において、「マク」「一マク」の例は現れず、「マウク」は単独動詞に加えて、名詞、複合動詞の例も見られ、形態上のパリエーションを見せている。また、意味の面において、「マウク」は①～⑤の意に加え、後で述べるように、訓点資料に見られない〈待ち受ける〉の意、〈新しく、夫、妻や子供、あるいは義理の親を持つ〉の意、〈具体物を必要な量に用意する〉の意に解される例も現われるようになり、意味用法の広がりが見られる。〈待ち受ける〉〈新しく、夫、妻や子供、あるいは義理の親を持つ〉〈具体物を必要な量に用意する〉の意をそれぞれ⑥⑦⑧として立項する。平安和文の「マウク」を①～⑧の意で分類したうえ、作品ごとに用例数を整理すると、【表2】を得る。

【表2】に示したように、平安和文の「マウク」計122例のなかで、②④の意に解釈される例は見出されず、①の意に解される例は19例、③の意と見られる例は5例、⑤の意に理解される例は49例、⑥の意に解釈される例は2例、⑦の意に解される例は30例、⑧の意に解される例は16例見られる。そのなかで、①③の意に解釈される例は『宇津保物語』『落窪物語』『源氏物語』に集中している。この三作品はいずれも漢文訓読の影響を受けているとされることを考えると、①③の意に解される「マウク」は漢文訓読の影響で用いられた可能性がある。次に、具体例を挙げながら、平安和文の「マウク」の意味用法を説明する。

①〈設置する〉の意…19例(会話文5例、地の文14例)

【表2】平安和文における「マウク」

作品 \ 用法	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		⑧		不明	計
	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地		
古今和歌集仮名序																		0
竹取物語																		0
伊勢物語																		0
土佐日記																		0
大和物語															2			2
平中物語																		0
蜻蛉日記												1						1
宇津保物語	2	8				2			3	19			1	1		4		40
落窪物語	1	1				1			1	1			3		1			9
枕草子															1			1
和泉式部日記																		0
紫式部日記										1								1
源氏物語	2	3				1			1	7			11	3	1	1	1	31
栄花物語		2				1			1	3			2			4		13
浜松中納言物語																		0
堤中納言物語																		0
更級日記																		0
夜の寝覚										2	1		1					4
狭衣物語									2	7			2	2				13
讃岐典侍日記															1			1
とりかへばや物語																		0
大鏡									1				1		4			6
計	5	14	0	0	0	5	0	0	9	40	1	1	21	9	7	9	1	122
	19	0			5	0			49	2			30		16		1	

注：①設置する ②敷く ③並べる ④施す ⑤具体物を移動できる状態に用意する ⑥待ち受ける  
⑦新しく、夫、妻や子供、あるいは義理の親を持つ ⑧具体物を必要な量に用意する

①の意に解される「マウク」の会話文のなかで、男性が発話した例は4例（正頼1例，正明1例，僧都2例），女性が発話した例は1例（北の方）である。北の方が発話した例（例（15））は夫の大納言（忠頼）を相手とする場面であり，北の方が用いた語は漢文訓読の影響を受けた可能性がある。「マウク」の目的語は，建物を表す名詞が10例，宴会を表す名詞が9例である。

(15) (北の方→大納言) 大将殿においたてまつりては，この家得たまはずとも，いとよくありなむ。男君もいと頼もう，みつばよつば（引用者注：三棟，四棟）もまうけたまひてむ。（会）（落窪物語・巻之四）

(16) かくて左の大臣殿には，三日の夜のこと，今はじめたるやうにまうけたまへり。（落窪物語・巻之四）

例（15）は，大部分の遺産を大将道頼夫妻に贈るという大納言の遺言を聞いた北の方の会話文であり，「マウク」は邸を三棟，四棟建てているという意を表すのに用いられている。

例（16）は，左大臣邸で三日の夜の露頭の儀式を設営した意味に解される。



③〈並べる〉の意…5例（会話文0例，地の文5例）

③の意に解される「マウク」の目的語は楽器を表す語1例，「筆」1例，「高坏」1例，「めでたきこと（室内の飾り物を指す）」1例，「御前（御先払いの意）」1例である。

(17) 御几帳の中に押し遣りて「いとよう侍る」とて御床に押しかかりて，琵琶弾きたまふ。したまはぬ，はたまうけたまふ。（宇津保物語・国譲中）

(18) 御心にもあらでうち誦じたまへるを，御車もと近き惟光うけたまはりやしつらむ，さる召しもやと例にならひて懐にまうけたる柄短き筆など，御車とどむる所にて奉れり。（源氏物語・濔標）

例(17)は，女一宮の近くに弾かない楽器も置いてあることを表す。例(18)は，惟光は，いつも懐中の中に置いてあった柄の短い筆などを光源氏に渡した文脈である。

⑤〈具体物を移動できる状態に用意する〉の意…49例（会話文9例，地の文40例）

⑤〈具体物を移動できる状態に用意する〉の意に解される〈マウク〉の目的語として，禄を表す語は35例で，車，船という交通道具を表す語は6例で，傘，箭，衣などその他の語は8例である。

(19) 私事のさまにしなしたまひて，禄など，いと警策にまうけられたりけり。（源氏物語・若菜上）

(20) (入道→光源氏) ころろみに舟のよそひをまうけて待ちはべりしに，いかめしき雨風，雷のおどろかしはべりつれば…（会）（源氏物語・明石）

(21) (少将→帯刀) 大傘一つまうけよ。衣脱ぎて来む。（会）（落窪物語・卷之一）

例(19)の禄は，禄を受け取った人とともに移動するものである。例(20)の「マウク」は，『萬葉集』に見られる「マウク」の例(例5)と同じく，船を出港できる状態に用意する意味を表す。例(21)の傘は少将，帯刀とともに移動するものである。

⑥〈待ち受ける〉の意…2例（会話文1例，地の文1例）

⑥の意に理解される「マウク」は，ある人，あるものがくるのを待ち受けることを表す。

(22) (乳母→大納言) 「遅くもと，いと心もとなく見たてまつるに，からうじて，かひあることをまうけたまはるかな。さても，いづくに，かくうつくしき御契りはものしたまひけるぞ」（会）（夜の寝覚・卷二）

(23) やり過ぎして，いまは立ちてゆけば，関うち越えて，打出の浜に死にかへりていたりたれば，先立ちたりし人，舟に菰屋形引きてまうけたり。（蜻蛉日記・中巻）

例(22)は，乳母がようやく待ち受けている，女の児を密かに引き取るという話を伺ったという意味を表している。例(23)は，打出の浜に先に着いた人は，同行する人を待ち受ける意味を表している。

⑦〈新しく，夫，妻や子供，あるいは義理の親を持つ〉の意…30例（会話文21例，地の文9例）

⑦の意と見られる「マウク」の目的語として，夫を表す語は8例で，妻を表す語は10例で，子供を表す語は11例で，義理の親を表す語は1例である。

(24) この女、いとわろくなりければ、思ひわづらひて、かぎりなく思ひながら妻  
をまうけてけり。 (大和物語・百四十九)

〈新しく、夫、妻や子供、あるいは義理の親を持つ〉の意に解釈される「マウク」は『大和物語』に最も早く見られる。この意に解釈される「マウク」は『萬葉集』に見られず、平安時代に新たに生じた用法と考えられる。

⑧〈具体物を必要な量に用意する〉の意…16例(会話文7例、地の文9例)

⑧の意に理解される「マウク」の目的語として、「調度」は3例、「御斎」「よろづのもの」「言葉」「兵」「御仏・経」「古今・後撰・拾遺(の書写本)」「経の函」「扇」「鶏」「器物」「衣」「食」「白き綾」は各1例である。

(25) すべて、よろづのもの、かねてよりまうけて、いとみみじく二なくして参り給ふ。 (宇津保物語・嵯峨の院)

(26) かくて殿の御前、かばかりよろづにし盡させ給事どもは…月頃御仏・経などまうけさせ給て、御四十九日行はせ給。 (栄花物語・卷第十九)

例(25)は、嵯峨の院で後の宮の六十の算賀のお祝いに必要なものを前々から必要な量に用意した文脈である。例(26)は、仏像やお経を必要な量に用意して、四十九日の仏事を行わせるという意味である。

以上、平安和文における「マウク」の①～⑧の意味用法を検討した。平安和文では、②〈敷く〉④〈施す〉の意に解釈される「マウク」は例が見出されない。①〈設置する〉③〈並べる〉の意と見られる「マウク」は発話主体や使用場面から漢文訓読の影響を受けた可能性があると考えられる。⑤〈具体物を移動できる状態に用意する〉⑥〈待ち受ける〉の意について、『萬葉集』に⑤の意に解される「マウク」の例、⑥の意に解釈される「カタマク」の例が見られるため、上代から平安時代に生き残った意味用法である。⑦〈新しく、夫、妻や子供、あるいは義理の親を持つ〉⑧〈具体物を必要な量に用意する〉の意は、『萬葉集』に例がなく、平安時代に新たに生じたものと考えられる。

## 五 和漢混淆文における「マウク」

和漢混淆文では、「マウク」は形式の面において、平安和文と同じく、単独動詞のほか、名詞、複合動詞でも用いられた。表記の面において、「マウク」は片仮名、漢字「儲」、漢字「設」という三つの形で書き表されている。具体的な作品に注目すると、『今昔物語集』計182例のうち、「設」で表記された例は8例で、「儲」で表記された例は174例である。観智院本『三宝絵』計15例のうち、仮名書き例は13例、「儲」で表記された例は2例である。『延慶本平家物語』計21例のうち、片仮名書き例は4例、「儲」「設」で表記された例それぞれ12例、5例である。『沙石集』6例、『法華百座聞書抄』3例、『保元物語』1例はすべて片仮名書きである。『三教指帰注』計6例のうち、片仮名書き例は5例、「儲」で表記された例は1例である。前田本二卷本『色葉字類抄』の「マウク」の項目(巻下上・33オ)に「儲<sup>マウク</sup>尚資偶漲設優助愈増歆供曾載貯<sup>マウク</sup>」とあり、「マウク」を書き表すのに「儲」

という字が最も多く用いられたことを示唆しているが、和漢混淆文では「マウク」を漢字で表記する傾向が見られず、『今昔物語集』の「マウク」の漢字表記に「儲」が多く見られるのは、「儲」字を用いようとする撰者の方針と見做すべきである。また、意味の面において、平安和文に見られる①～⑧の意味に加え、後で述べるように、〈思わぬものを手に入れる〉の意に解される例も見られるようになった。本節では、〈思わぬものを手に入れる〉の意を⑨の意として立項し、和漢混淆文の「マウク」を①～⑨の意で分類すると、【表3】を得る。

【表3】和漢混淆文における「マウク」

作品	用法	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		⑧		⑨		計
		会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	
説話集	観智院本三宝絵		3							3	4					1	4			15
	三教指帰注							1						3	1	1				6
	古本説話集								1					1			2	1		5
	金沢文庫本仏教説話集													2		1	2		1	6
	沙石集				1						1				1	1	1	1		6
	十訓抄	1																		1
	打開集														1					1
	天竺震旦	4	10	1	1			1	2	2	6			5	5	6	10		2	55
	今朝弘法	3	19	1			3			1	11			5	7	8	19	1	1	79
	今朝世俗		3				3			4	4	2	1	3	7	3	18			48
小計	7	32	2	1	0	6	1	2	7	21	2	1	13	19	17	47	1	3	182	
宇治拾遺物語		39		3		6		3		28		3		32		64		4		
軍記物語	延慶本平家物語		2							2	4			2	5	2	3		1	21
	土井本太平記	1	3	1	1	2		1			1			4	2		1			17
	保元物語													1						1
開書	法華百座開書抄		2														1			3
計		9	42	3	3	2	8	2	3	13	34	2	1	24	34	23	72	4	6	285
		51		6		10		5		47		3		58		95		10		

注：①設置する ②敷く ③並べる ④施す ⑤具体物を移動できる状態に用意する ⑥待ち受ける  
 ⑦新しく、夫、妻や子供、あるいは義理の親を持つ ⑧具体物を必要な量に用意する ⑨思わぬものを手に入れる

【表3】に示したように、和漢混淆文の「マウク」は計285例のうち、①の意に解される例は51例、②の意に解される例は6例、③の意に理解される例は10例、④の意に解される例は5例、⑤の意に解される例は47例、⑥の意と見られる例は3例、⑦の意に理解される例は58例、⑧の意に解される例は95例、⑨の意に解釈される例は10例である。次に、具体例を挙げながら、和漢混淆文の「マウク」の意味用法を説明する。

①〈設置する〉の意…51例（会話文9例、地の文42例）

①の意に解される「マウク」の目的語は、建物を表す語が11例、法会、宴会を表す語が38例、官職を表す語が1例、兵隊を表す語が1例である。

(27) 其レヲ便トシテ世ヲ過スニ、便リ只付キニ付テ、家ナド儲テ楽シクゾ有ケル。  
 (今昔・16ノ28)

(28) 家ノ人、此ノ事ヲ聞テ、弥ヨ信ヲ口（筆者注：オコ）シテ、其ノ日ヲ以テ齋会ヲ設ク。  
 (今昔・7ノ31)  
 出典：奴遂生而具言之。家中果以其日設会。（前田本冥報記・下巻）

(29) 帝王の業、万機事繁くして、百司位を設く。（土井本太平記・巻二十二）

例(27)～(29)はそれぞれ建物を建てること、法会を設営すること、官職を立てることを表している。

②〈敷く〉…6例（会話文3例，地の文3例）

②の意に解される「マウク」は平安和文に例が見出されないが，和漢混淆文では，地の文，会話文それぞれ3例見られ，座席を表す語を目的とする。

(30) (牛→僧) 若シ其ノ虚実ヲ知ラムト思ハバ，我ガ為ニ座ヲ儲ケヨ。

(会)(今昔・14ノ37)

『今昔物語集』では，〈敷く〉の意に解釈される「マウク」は，漢文訓読調の強いとされる天竺震旦部，本朝仏法部に見られるが，和文調の強いとされる本朝世俗部に見られないことから，〈敷く〉の意は，典型的な漢文訓読的な意味であると推測される。

③〈並べる〉の意…10例（会話文2例，地の文8例）

③の意と見られる「マウク」の目的語として，飲食を表す語は7例，楽器を表す語は1例，楯を表す語は1例，守り人を表す語は1例である。

(31) 阿闍世王，提婆達多ガ教ヲ信ジテ，父ノ頻婆沙羅王ヲ捕ヘテ幽ニ人離タル所ニ七重ノ強キ室ヲ造テ其ノ内ニ箆置テ堅固ニ戸ヲ閉テ善ク門ヲ守ル人ヲ設テ誠テ云ク…

(今昔・3ノ27)

(32) 長櫃ニ火多くオコシテ，畳厚ク敷タルニ，菓子食物ナド儲タル様，微妙也。

(今昔・26ノ17)

〈並べる〉の意に解釈される「マウク」は，ある場所にヒト・モノを並べる文脈に用いられている。例(31)は，七重の室の入り口で門を守る人を並べる意味である。例(32)は，火鉢にたくさんの火を起こして，畳を厚く敷き，その上に果物や菓子を並べている様子を描いている。

④〈施す〉の意…5例（会話文2例，地の文3例）

④の意に解釈される「マウク」の目的語として，「方便」は3例，「教」は2例である。

(33) 今昔，天魔，種々ノ方便ヲ儲テ菩薩ノ成道ヲ妨ゲ奉ラムト為ト云ヘドモ，菩薩，芥子許モ犯サレ給フ事无シ。

(今昔・1ノ7)

(34) 駆人(ト)云(フ)ハ如来大教ヲマウケテ人天カリアツメテスクウ事也。

(三教指帰注)

『今昔物語集』では，例(33)のように，「方便」を目的語とする「マウク」は，計3例見出されるが，いずれの出典にも対応する漢文表現が見られない。ただし，大正新脩大蔵経データベース(SAT2018)を「設方便」で検索すると，328例見られる。〈施す〉の意は仏教漢文の影響により用いられたと考えられる。

⑤〈具体物を移動できる状態に用意する〉の意…47例（会話文13例，地の文34例）

⑤の意と見られる「マウク」の目的語は，舟，車，馬，牛など交通道具を表す語は12例，布施を表す語は9例，軍兵を表す語は8例，劍，刀，鞭，箭など武器を表す語は6例，衣，烏帽子など衣類を表す語は4例，笛という楽器を表す語は3例，鉢を表す語は2例，その他の語（「馬の口縄」「踊り」「猫」）は3例である。

(35) 南門ニ御船儲タリケレバ，無程移ラセ給ニケリ。(延慶平家物語・第二中)

(36) 王、数千万ノ軍兵ヲ儲テ合戦ヲ企ト云トモ、此ノ国ノ軍、数モ劣リ武キ事モ劣テ既ニ罰チ取ラレヌベシ此ニ依テ王宮騒動シテ逝去ム事ヲ歎キ悲ム事、无限シ。

(今昔・3ノ15)

例(35)のような、船を目的語とする「マウク」は、『萬葉集』、平安和文にも見られ、〈具体物を移動できる状態に用意する〉の意に解釈される典型的な例である。例(36)では、王は数千万の軍兵を戦場に向かわせる(移動させる)ために用意しようとしたことが述べられている。

⑥〈待ち受ける〉の意…3例(会話文2例、地の文1例)

⑥の意に理解される「マウク」の目的語は、猪を表す語が1例、人を表す語が2例である。

(37) 来ラント為ル敵モ人ノ体ニハ非ズ、儲ケンズル我ガ身モ亦人ノ体ニハ非ズ。

(今昔・26ノ9)

〈待ち受ける〉の意に解される「マウク」の3例は『今昔物語集』の本朝世俗部に集中しており、典型的な和文的な意味であると言える。

⑦〈新しく、夫、妻や子供、あるいは義理の親を持つ〉の意…58例(会話文24例、地の文34例)

⑦の意に解される「マウク」の目的語として、夫を表す語は4例で、妻を表す語は21例で、子供を表す語は32例で、義理の親を表す語は1例である。

(38) 武蔵守タリシ時、彼国へ被下タリシニ儲ラレタリケル子ナリ。(延慶本平家・第一末)

〈新しく、夫、妻や子供、あるいは義理の親を持つ〉の意に解される「マウク」の例は、『三教指帰注』『古本説話集』『金沢文庫本仏教説話集』『沙石集』『打聞集』『今昔物語集』『延慶本平家物語』『保元物語』『土井本太平記』と多くの作品に見られ、〈新しく、夫、妻や子供、あるいは義理の親を持つ〉の意は漢文訓読に関する意味のように見える。しかし、『今昔物語集』では、天竺震旦部10例、本朝仏法部12例、本朝世俗部10例と平均に分布している点から、〈新しく、夫、妻や子供、あるいは義理の親を持つ〉の意は、和文的な意味であるが、和漢混淆文にも多く用いられていると推測される。

⑧〈具体物を必要な量に用意する〉の意…95例(会話文23例、地の文72例)

⑧の意に解釈される「マウク」の目的語は、飲食、供養を表す語は53例、武士、宿直、弟子、相撲人など人を表す語は11例、お経、お経の料紙を表す語は5例、葉を表す語は3例、「備え」「鎌」各2例、鞭打つための支度を表す語は1例、「筆」「勢い」「亀」「馬の草」「松の葉」「財宝」「棺」「玉帛」「羊」「葬の具」「魚鳥」「器」「火」「桶」「糸」「領地」「金」「一塵の物」は各1例である。

(39) 又、物のあまりたりければ、供養を設けて…(古本説話集・下・七十)

(40) 其ノ後、此ノ男国ノ内ニ知識ヲ引テ、経ノ料紙ヲ儲ク。(今昔・14ノ9)

例(39)(40)では、法会の供養、写経の料紙を必要な量まで用意することが述べられている。

⑨〈思わぬものを手に入れる〉の意…10例(会話文4例、地の文6例)

⑨の意に解される「マウク」の目的語は、「財」3例、「いみじきもの（宝物を指す）」2例、「利益」1例、「小袖」1例、「材木」1例、「衣」1例、「手鉢」1例である。

(41) (男→家主) 此レハ不意ニ儲給ヘル財ニコソ有ナレ。 (会) (今昔・5ノ19)

(42) ソノカミ安芸守ニテ神拝セラレケル時、巖嶋社ヨリ靈夢ヲ蒙テ儲ラレタリケル、  
白金ノ蛭巻シタル秘蔵ノ手鉢ノ、常ニ枕ヲ放タザリケル。(延慶本平家・第一末)

「マウク」の目的語の多くは例(41)の「財」、(42)の「白金ノ蛭巻シタル秘蔵ノ手鉢」のように、利益をもたらすことを表す語である。

以上、和漢混淆文における「マウク」の①～⑨の意味を考察した。そのなかで、①〈設置する〉②〈敷く〉③〈並べる〉④〈施す〉の意は、訓点資料に例が見られ、漢文訓読の影響を受けて用いられたと考えられる。⑤〈具体物を移動できる状態に用意する〉⑥〈待ち受ける〉⑦〈新しく、夫、妻や子供、あるいは義理の親を持つ〉⑧〈具体物を必要な量に用意する〉の意は平安時代の意味用法がそのまま院政鎌倉時代に生き残ったものである。⑨〈思わぬものを手に入れる〉の意は院政鎌倉時代に新たに生じたものである。

## 六 おわりに

本稿では、漢文の「設」の意味と、『萬葉集』の「マウク」の固有の意味をもとに、訓点資料、平安和文、和漢混淆文における「マウク」の意味用法を検討した結果、以下のよう  
にまとめられる。

⑤〈具体物を移動できる状態に用意する〉⑥〈待ち受ける〉の意は、『萬葉集』に例があり、「マウク」の固有の意味として、平安和文と和漢混淆文に生き残ったものである。

①〈設置する〉③〈並べる〉の意は、和漢混淆文のみならず、平安和文にも例が見られ、漢文訓読的な言葉遣いをしそうな人物に用いられており、和文にも導入された漢文訓読的な意味と言える。

②〈敷く〉④〈施す〉の意は、平安和文に例がなく、和漢混淆文のみに例が現われ、①③と比べ、より本格的な漢文訓読的な意味と考えられる。

⑦〈新しく、夫、妻や子供、あるいは義理の親を持つ〉⑧〈具体物を必要な量に用意する〉の意は『萬葉集』に例がなく、平安時代に例があり、平安時代に新たに生じたものである。⑨〈思わぬものを手に入れる〉の意は、『萬葉集』、平安和文のいずれにも例がなく、院政鎌倉時代に新たに生じたものである。

### 【注】

1 「マウク」の語源説は、①「マクの母音ウ挿入形」とする日本古典文学全集、新編古典文学全集の説、②「間受く」とする日本古典文学大系の説、③「真受く」とする『小学館古語大辞典』の説、④「マ＋下二段動詞ヲク」とする間宮(1986)の説という四つ見られる。そのなかで、①「マクのウ音挿入形」の説は、「母音の連続を嫌う傾向にある上代語で、敢えてウを挿入する必然性は乏しい」と『小学館古語大辞典』(「語誌」は山口佳紀執筆)に否定されている。②「間受く」の説、③「真受く」の説は共に「マ

ウク」を原形としている。「マク」が「マウク」の母音ウの脱落した語形と見る場合、mauku という不安定な形の方が平安時代以降定着し、比較的長時間保持したことが成り立ちがたいと間宮に否定されている。間宮は、四段動詞「ヲク」が文献に見られるところから、記録に残らなかったが、〈対象がやってくることをあらかじめ予想して、用意して、待ち受け、迎える〉の意の下二段動詞「ヲク」が存在したという仮説を立て、mawoku) mawku ) mauku という音変化の過程を経て、「マヲク」は「マウク」に変わったと推測され、「マウク」の語源が「マ+下二段動詞ヲク」であるとしている。

#### 【参考文献】

- 蜂矢 宣朗 (1955) 「卷十九」『萬葉集大成 卷四』平凡社, pp.342-343
- 築島 裕 (1963) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
- 間宮 厚司 (1986) 「マウク (設・儲) の語源について」『学習院大学上代文学研究』11, pp.6-14
- 土居裕美子 (2005) 「平安鎌倉時代における「まうく」「かまふ」の意味用法」『日本語文化研究』8, pp.13-26
- ジスク・マシュー (2009) 「和語に対する漢字の影響—「写」字と「うつす」の関係を一例に—」10, pp.6-45, 日本漢字能力検定協会
- (2012) 「啓蒙表現における漢字を媒介とした意味借用—和語「あかす」の意味変化過程における「明」字の影響」『国語文字史の研究』13
- 鳴海 伸一 (2016) 「語史研究の方法」『日本語語史叙述の方法』ひつじ書房, pp.235-263

#### 【資料】(辞典・データベース以外で使用了本文・索引をあげる)

[和文] 池田利夫『浜松中納言物語総索引』武蔵野書院, 宇津保物語研究会『宇津保物語 本文と索引』笠間書院, 阪倉篤義ほか編『夜の寝覚総索引』明治書院, 塚原鉄雄ほか編『狭衣物語語彙索引』笠間書院, 鈴木弘道『とりかへばや物語総索引』笠間書院, 高知大学人文学部国語史研究会『栄花物語 本文と索引』武蔵野書院 [和漢混淆文] 山内洋一郎『古本説話集総索引』風間書房, 馬淵昌子ほか編『今昔物語集文節索引』笠間書院, 小林芳規『法華百座聞書抄総索引』武蔵野書院, 坂詰力治・見野久幸『平治物語総索引』武蔵野書院, 築島裕・小林芳規『中山法華経寺蔵本三教指帰注総索引及び研究』武蔵野書院, 深井一郎『慶長十年古活字本沙石集総索引』勉誠社, 東辻保和『打開集の研究と総索引』清文堂, 坂詰力治・見野久幸『保元物語総索引』武蔵野書院, 中央大学国語研究会『三宝絵詞自立語索引』笠間書院, 山田巖・木村晟『歎異抄 本文と索引』新典社, 北原保雄・小川栄一『延慶本平家物語 本文と索引』勉誠社, 山内洋一郎『金沢文庫本仏教説話集の研究』汲古書院, 西端幸雄・志甫由紀恵『土井本太平記 本文及び語彙索引』勉誠出版

[付記] 本稿は、2022年度春学期同志社大学国文学会(2022年6月19日)における口頭発表に基づき、加筆修正したものです。多くの貴重なご意見を賜りました方々に、心より御礼申し上げます。